

Title	京大広報 No. 471
Author(s)	
Citation	京大広報 (1994), 471: 820-837
Issue Date	1994-09-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/209163
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 471

京都大学広報委員会

目次

大学における性差別の問題をめぐって

総長 井村 裕夫……821

<大学の動き>

井村総長、ギリシャ共和国等訪問……821

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講……821

京都大学市民講座の開講……822

<部局の動き>

平成6年度文学部博物館特別公開展示……823

医療技術短期大学部説明会……823

—公開講座—

医療技術短期大学部「健康科学公開講座

—ストレスをめぐって—」……824

人文科学研究所

「コミュニケーションにドラマをみる」……824

工学部「人類の持続的発展と工学」……824

農学部「農業簿記・農業経営講習会」……824

理学部「現代数学展望」……825

数理解析研究所「数学入門」……825

防災研究所「防災科学の最先端」……825

農学部附属演習林「森のしくみと働き

—芦生演習林への招待—」……826

霊長類研究所「霊長類の進化」……826

<資料>

平成5年度学生生活実態調査報告……827

国立大学教官等の待遇改善及び厚生補導

施設の整備充実に関する国立大学協会

の要望書……828

—京都大学の百年（第1回）—

学内における記念植樹について……832

平成6年度文学部博物館秋季企画展の開催……833

計報……834

日誌……835



玉 雲「天王山勇士訣別之図」

—関連記事本文833ページ—

<随想>

魚は驚くほど絶食に強い

—その生命力の謎の探求—

名誉教授 池田 静 徳……836

<コラム>

無用の用

宮 岡 洋 一……837

大学における性差別の問題をめぐって

基本的人権の尊重は、近代社会の重要な原則であります。従って教育の場である大学においては、特に人権に十分な配慮がなされなければなりません。そのため京都大学においては同和問題委員会を設け、単に同和問題のみでなく様々な偏見・差別をなくすよう、講演会などの活動を行ってきました。また、すでに20年余りにわたって、同和教育・障害者教育・民族教育などの教職科目を開設してきたほか、最近では全学共通科目として、「人権・差別・偏見」に関する講義も始めました。

そのような活動にもかかわらず、いわゆる「セクハラ」疑惑が起こったことは、誠に遺憾なことであります。ことがらはプライバシーに深くかかわる問題であり、真実はなお明白ではありません。しかし、このことは、私達に改めて大学における性差別の問題を提起致しました。現在の社会通念となっている性意識は、男性が外で働き女性が家庭を守るといういわば男性中心の社会構造の中で作られてきたものでありますが、女性の社会進出とともに通念のもつ矛盾が顕在化して、いま男女の新しい性規範が求められています。このような時代の変化をよく理解して、相手の意に反する性的言動がないよう十分注意し、個人の尊厳を守ることが、教育・研究の場や職場において大変重要であると考えます。

京都大学においては、今後性差別にかかわる人権問題が生じないように、啓蒙活動が続ける予定であります。また問題があった場合、相談できる仕組みを設けることも検討しています。しかし、最も大切なことは、相手の人間性を尊重することでありましょう。私達の社会が長い間に生み出してきた性差別の実態を直視し、京都大学においてそのような人権の侵害が起らないようすべての教職員は努力していかなければなりません。

総長 井 村 裕 夫

<大学の動き>

井村総長、ギリシャ共和国等訪問

井村総長は、高等教育の実情調査等のため、7月1日からギリシャ共和国、ハンガリー共和国及び連合王国に出張し、7月11日帰国した。

ギリシャ共和国への訪問は、昨秋、京都市内で

開催された国際会議に出席の際にアテネ大学長から招請を受けていたものであり、同大学をはじめ同国における高等教育、学術研究の現状についてゲムトス学長等との懇談及び大学施設の視察を行った。

次いでハンガリー共和国及び連合王国を訪問し、高等教育機関の現状及び学術交流の状況等について意見交換を行った。

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下に、下記のとおり「京都大学春秋講義（秋季講座）」を開講する。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ「生涯学習を考える」

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月17日	教育学部教授 上 杉 孝 實	生涯学習を考える ―理念・政策・実態―
10月24日	医学部教授 柴 崎 浩	脳のはたらきと生涯学習
10月31日	工学部教授 上 林 彌 彦	高度情報化社会と生涯教育
11月7日	農学部教授 矢 澤 進	生涯学習と園芸
11月14日	文学部助教授 岩 城 見 一	「芸術」概念の成立と「生涯学習」における美的教養の意義
定 員 120名		
受 講 料 6,000円（全講義を通しての受講料です。）		

水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月19日	教育学部教授 齋 藤 久美子	愛着の臨床心理学
10月26日	農学部教授 伏 木 亨	美味しい食べ物の科学
11月2日	法学研究科教授 大 嶽 秀 夫	自由主義的改革と社民リベラル路線
11月9日	工学部教授 小久保 正	傷ついた革を折ることなく ―体を支えるセラミックス―
11月16日	理学部教授 瀬戸口 烈 司	恐竜の虚像と実像
定 員 各講義 120名		
受 講 料 各講義 1,200円		

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○申込締切日 9月29日（木）

○申 込 方 法

① 月曜講義、水曜講義それぞれ別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を記入すること。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず記入すること。返信はがきにも住所・氏名を記入すること。

② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）



京都大学市民講座の開講

本学では、来る10月22日、29日、11月5日の各土曜日に広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を開講する。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、昭和54年以来毎年開かれているもので、今年度は、「ながれ」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる講義が行われる。

○受 講 定 員 400名

○受 講 料 2,000円（全講義を通しての受講料です。）

○申込方法

- ① 往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入（返信はがきにも住所・氏名を記入）の上、9月29日（木）までに下記の申込み先へ申し込むこと。
- ② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。
- ③ なお、本講座を本学教職員並びに学生にも広く開放するため、50名の特別受講枠（無料）を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

○会場 法経第四教室

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）

講義日程 共通テーマ —ながれ—

開 講 日	テ ー マ	講 師
第1日 10月22日（土） 13:00～16:40	開講のあいさつ	総 長 井 村 裕 夫
	血液の健やかなながれを保つために	医 学 部 教 授 篠 山 重 威
	おカネのながれ	経 済 学 部 教 授 古 川 顯
第2日 10月29日（土） 13:00～16:30	時のながれ、歴史のながれ	文 学 部 教 授 大 山 喬 平
	黒潮のながれ —その水はどこから来て、どこへ行くか—	理 学 部 教 授 今 里 哲 久
第3日 11月5日（土） 13:00～16:40	ゴールドラッシュと人・物・情報のながれ —19世紀末・カナダ北部のばあい—	総合人間学部教授 山 田 誠
	災害をもたらすながれ —洪水流・土石流・火砕流—	防災研究所教授 高 橋 保
	閉講のあいさつ	教育学部教授 柴 野 昌 山

<部局の動き>

平成6年文学部博物館特別公開展示

文学部博物館では、7月16日（土）で平成6年特別公開展示を終了した。

展示内容、入館者数は次のとおりである。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
6/14～7/16	屏 風 絵 展	人	人	人	人	人
	日本古代文化の展開と東アジア	2,302	567	451	461	3,781

（特別観覧とは学術研究、視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。）

（文学部）

医療技術短期大学部説明会

医療技術短期大学部では、7月21日（木）午後1時30分より5時まで、本短期大学部についての説明会を開催した。

説明会には高校生238名、高校進路指導教諭19名の参加者があった。

説明会では、まず大講堂において、参加者全員に本短期大学部の特色、入試概要、各学科の教育

内容を、資料及びスライドを用いて説明した。次に参加者を6グループに分けて、約1時間学内施設見学を実施した。最後に、各学科ごとに分かれての個人相談を行い、参加者と教官との懇談の機会を設けた。また、学生生活や入試に関する一般的な相談にも応じた。

参加者の88.7%がアンケート調査に応じ、その内の96.7%よりこの説明会が参考になったとの回答を得た。（医療技術短期大学部）

—公開講座—

医療技術短期大学部

「健康科学公開講座 —ストレスをめぐる—」

医療技術短期大学部は、一般市民を対象に、第7回健康科学公開講座を6月25日から7月16日までの毎週土曜日午後、4回にわたり同短期大学部講義室において開催した。

本年度は「ストレスをめぐる」をテーマに、生活の場におけるストレスの実際、病気との関連、最後にストレス解消法について、下記の題目でそれぞれの講師が専門分野の立場から講義した。

講座は、井村裕夫学長の開講のことばに始まり、毎回の講義では活発な質疑応答がなされ、最終回の講義のあと高橋清之部長の公開講座のまとめと謝辞で閉講した。

今回の公開講座の出席者は104名であった。

ストレスと病気	中 井 義 勝
ストレスと突然死	藤 田 正 俊
ストレスと子供の精神保健	石 坂 好 樹
職場でのストレス	角 谷 慶 子
育児とストレス	菅 沼 美奈子
老人介護上でのストレス	川 上 鈴 子
看取りとストレス	藤 腹 明 子
ストレス解消法	石 原 俊 一

(医療技術短期大学部)

人 文 学 科 研 究 所

「コミュニケーションにドラマをみる」

人文科学研究所では、夏期公開講座を7月8日(金)及び9日(土)の2日間、午後2時から5時まで本研究所本館大会議室において開催した。

1949年以来45回を迎えた本年の講座は、「コミュニケーションにドラマをみる」を共通テーマとし、連日100名を超える受講者があった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

会話のトピックはいかにつくられていくか

禪 問 答

串 田 秀 也
吉 川 忠 夫

笑いの本地・笑いの本願
フィクションとはなにか

谷 泰
大 浦 康 介
(人文科学研究所)

工 学 部

「人類の持続的発展と工学」

工学部では、一般市民を対象として第14回公開講座を7月18日から29日までの2週間、6回にわたり毎週月・水・金曜日に開催した。時間は午後6時30分から午後8時30分まで、場所は工学部電気総合館であった。受講者は87名であった。

工学が人類の持続的発展に貢献していることはいうまでもないが、多様な内容をもつこれからの工学は、それぞれの専門分野での課題を追求するとともに、それが、人間、社会、あるいは地球全体にとってどういう意味を持ち、また影響を与えるかということを考えながら発展させてゆかねばならない。このような立場から、工学の根底にある設計という概念を機械や道路、町づくり、さらには生体分子やエネルギー、宇宙の問題などにおいてどのようにとらえているかを、それぞれの研究を通じて明らかにした。

なお、講義題目・講師は次のとおりであった。

生体分子(蛋白質)の世界

—偶然と必然の調和— 森 島 績
機械生産システムの歴史と将来

垣 野 義 昭
次世代の道路交通システム 飯 田 恭 敬
生活の質とまちづくり 内 井 昭 藏
スペースデブリの現状 —宇宙のゴミ—

佐 藤 亨
エネルギー社会工学 新 宮 秀 夫
(工学部)

農 学 部

「農業簿記・農業経営講習会」

農学部附属農業簿記研究施設では、恒例の夏期公開講座「農業簿記・農業経営講習会」を、7月

18日（月）から23日（土）までの6日間、午前9時から午後5時まで農学部講義室等において開催した。

本講習会は本年で第58回目を数える伝統的講習会であって、日頃、農村及び農家の経営指導に従事する人達に研修の機会を提供するものである。今年も、農業改良普及員、農業協同組合関係職員、農林行政関係職員、高等学校教員、その他団体職員など、全国各地から86名が参加して行われた。

講習科目及び講師は次のとおりであった。

家族経営・法人経営の発展・合理化のための
「農業簿記」：原理と実務

稲 本 志 良・小 田 滋 見
農業経営・地域革新のための農業投資および資金の計画・管理・分析

稲 本 志 良・辻 井 博
地域農業および農業経営の分析・診断・計画

藤 谷 築 次・武 部 隆

新 山 陽 子・吉 野 章

（農学部）

理 学 部

「現代数学展望」

理学部数学教室では、7月25日（月）から29日（金）までの5日間、標記の公開講座を同教室講義室において開催した。

この公開講座は、数学教育関係者をはじめ現代数学に興味ある大学生、高校生を対象に、いくつかの話題を選び、数学の最近の発展について講義し、今後の展望を示唆することを目的としている。

16年目の今年は、各地から53名の受講者があった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

楕円曲線、保型形式と谷山一志村予想

斎 藤 裕

ブラウン運動をめぐって

重 川 一 郎

波動方程式と波面集合

大 鍛 治 隆 司

（理学部）

数 理 解 析 研 究 所

「数 学 入 門」

数理解析研究所では、8月8日（月）から12日（金）までの間、午前10時30分から午後4時まで数理解析研究所4階大講演室において、公開講座「数学入門」を開催した。

この公開講座は、社会人、中学校・高等学校教員、学生等を対象に、専門的題材をわかりやすく解説するものであり、104名が受講した。

講義題目、講師は次のとおりであった。

代数曲線の幾何 森 重 文

プログラミング言語の数理モデル

大 堀 淳

楕円曲線と整数論

玉 川 安 騎 男

（数理解析研究所）

防 災 研 究 所

「防災科学の最先端」

防災研究所は、8月23日（火）・24日（水）の両日午前10時から午後5時まで、大阪市西区の建設交流館において京都大学防災研究所公開講座「防災科学の最先端」を開催し、180名が受講した。

この講座では、一般市民を対象として、私達の社会を災害の脅威から守るために行われている研究の最新の方法と、そこから得られた事実について、観測技術、情報処理技術、解析技術に加え、さらに歴史的方法論にまで及ぶ幅広い話題をとりあげて講義した。第1日目は総説及び火山噴火予知、地震予知及び地理情報システムをテーマとした3講義、第2日目はドーム等の大空間建築、集中豪雨及び防災の歴史認識についての3講義を行った。各日とも講義終了後活発な質疑応答がなされ、社会的にも関心の高さがうかがわれた。

それぞれの講義題目と講師は次のとおりであった。

総説 解明から予知へ 梅 田 康 弘
山が火を噴く

—火山噴火予知の最先端— 石 原 和 弘

宇宙から地球を診断する

—宇宙技術で測る大地の動きと地震予知—

平 原 和 朗

立体地図で災害に備える

—防災・環境の地理情報システム—

角 本 繁

さらに大きな空間建築を目指して

—大空間構造と防災— 國 枝 治 郎

電波で探る集中豪雨

—レーダーによる観測と予知—

中 北 英 一

中世人にとっての災害観

—歴史認識としての防災— 笹 本 正 治

(防災研究所)



(農学部附属演習林)

農学部附属演習林

「森のしくみと働き —芦生演習林への招待—」

農学部附属演習林では、8月25日(木)から27日(土)までの3日間芦生演習林(京都府北桑田郡美山町芦生)において公開講座「森のしくみと働き —芦生演習林への招待—」を開催した。

この講座は、一般市民を対象として、芦生の自然と森林についての解説と、森林を構成する樹木の分類法とその実習など、森林自然を理解するための基礎的知識から森林のもつ資源生産、公益的機能までを解説するもので、今回で4回目になる。

講座の第1日と第3日は講義にあて、第2日は森林内での実習を行い、48名が受講した。

なお、参加希望者は年々増加しており、今年は150名に達した。一般市民の森林に対する関心の高さがうかがわれる。

それぞれのテーマ及び担当者は次のとおりであった。

芦生の自然について(講義)

演習林とはなにか

竹 内 典 之

芦生の自然

中 島 皇

森と動物

高 柳 敦

樹木の識別

山 中 典 和

天然林内での講義並びに実習

川那辺 三 郎

ほか8名の教官

森林と人間の関わり(講義)

日本の森林・世界の森林

大 畠 誠 一

森林資源の育成

川那辺 三 郎

森林利用について

神 崎 康 一

霊長類研究所

「霊長類の進化」

霊長類研究所では、8月25日(木)・26日(金)の両日にわたって愛知県犬山市の本研究所会議室において公開講座を開催した。今年は第10回目である。

参加者は、小・中・高・大学教員、会社員、主婦、学生と幅広い。参加者数は63名で、中部、近畿地方からの参加が多かった。

今回は、霊長類の免疫機構や音声コミュニケーションの側面から、また、形態及び社会生活の環境への適応という観点から進化に対する意見が述べられた。

実習は、受講者全員の参加により行われ、研究の現状と霊長類に対する深い理解が得られるよう配慮された。

講義・実習題目と講師は以下のとおりであった。

総合司会 後 藤 俊 二

霊長類の生体防御：サル類の花粉症

中 村 伸

霊長類のたどった道

相 見 満

霊長類の聴覚と音声

小 嶋 祥 三

オランウータンの社会生活と熱帯林生態学

鈴 木 晃

形態、骨学実習

國 松 豊

心理学実習

友 永 雅 己

サルの野外行動観察実習

森 明 雄

遺伝学実習

庄 武 孝 義

(霊長類研究所)

<資料>

平成5年度学生生活実態調査報告

学生部は厚生施策の企画・実施のための基礎資料を得るため、昨年11月にこの調査を行い、その集計結果を『学生生活実態調査報告』としてまとめた。

学生生活の現状について理解を深めるため、ここに参考として調査の概要を紹介する。なお、本調査報告に関心のある方は、学生部厚生課厚生企画掛、各学部教務掛（工学部は厚生掛）及び総合人間学部学生・厚生掛で報告書を閲覧されたい。

調 査 の 概 要

1 調査の目的

この調査の目的は、京都大学学生の主に経済生活の実態を把握し、有効適切な厚生施策を実施するための基礎資料を得ることである。この目的のために、昭和28年以来全学的調査を毎年定期的に行い、昭和43年以降は隔年ごとに実施してきた。このたびの調査は、その第28回目にあたる。

2 調査の方法

(1) 企 画

平成5年9月の学生部委員会において調査の期日、対象、方法について実施上の細目を確定した。

(2) 調査期日

平成5年11月1日

(3) 母集団と抽出標本

調査対象は、平成5年10月1日現在における在学学生中、外国人留学生、休学者を除いたものである。母集団となる調査対象は次のとおりである。

学部男子学生	11,077名	大学院修士課程学生	2,608名
学部女子学生	1,675名	大学院博士後期課程学生	1,617名
計	12,752名	計	4,225名
		合 計	16,977名

抽出には例年のごとく層化無作為抽出法を採用した。学部学生からは男女とも10分の1（前回どおり）、大学院学生からは男女とも4分の1（前回は男女とも2分の1）の割合で抽出し、調査を行った。この結果から得られた標本数2,332で全調査対象学生数16,977名の約13.7%にあたる。

回収総数は1,714で標本数2,332からみると、回収率は73.5%である。各々の標本数、回収数、回収率を示すと次のようになる。

区 分		項 目	標 本 数	回 収 数	回 収 率 (%)
学 部	1 ・ 2 年 次 男 子		511	291	56.9
	3 年 次 以 上 男 子		595	420	70.6
	全 学 女 子		168	117	69.6
学 部 合 計			1,274	828	65.0
大 学 院	修 士 課 程	文 科 系	100	77	77.0
		理 科 系	553	500	90.4
	博士（後期）課程	文 科 系	74	54	73.0
		理 科 系	331	255	77.0
大 学 院 合 計			1,058	886	83.7
学 部 ・ 大 学 院 総 計			2,332	1,714	73.5

3 調査結果の要約

主 な 事 項			学 部 学 生	大 学 院 学 生
家 庭	家庭の所在地	京 都 府 下	10.0%	15.9%
		近畿地方（京都府下を含む）	57.3%	52.7%
	家計支持者の職業が俸給生活者		77.0%	65.5%
	家庭の全年収（平均値）		11,107,989円	9,994,704円
ア ル バ イ ト	過去半年間にアルバイトをした者		77.6%	69.1%
	使 途	衣食住、勉学費に使用した者	41.3%	71.8%
		上記以外に使用した者	57.6%	26.0%
奨 学 金	受 給 し て い る 者		23.1%	55.8%
通 学	徒 歩 の み		11.9%	21.2%
	自 転 車		46.2%	37.0%
住 居	自 宅 通 学 者		27.8%	22.5%
	京 都 市 内 居 住 者		77.1%	87.1%
勉 学	授 業 ・ 研 究 時 間		4.1時間	7.2時間
	自 習 時 間		1.8時間	1.6時間
課外サークル	加 入 し て い る		76.1%	35.2%
収 入 月 額 (自宅外通学者)	家 庭 か ら (平 均 値)		97,800円	57,400円
	ア ル バ イ ト ・ 奨 学 金 (平 均 値)		43,700円	88,800円
	収 入 金 額 合 計 (平 均 値)		144,100円	153,400円
支 出 月 額 (自宅外通学者)	部 屋 代 (平 均 値)		46,400円	38,300円
	食 費 (平 均 値)		44,400円	43,100円
	勉 学 費 ・ 書 籍 費 合 計 (平 均 値)		8,700円	13,000円
	支 出 金 額 合 計 (平 均 値)		159,300円	156,200円

注記 アルバイトの使途の割合は第一順位の数値を表記した。衣食住、勉学費に使用した者と上記以外に使用した者の合計が100%にならないのは、無回答、誤記入があるためである。

(学生部)

国立大学教官等の待遇改善及び 厚生補導施設の整備充実に関する 国立大学協会の要望書

国立大学協会第94回総会において、国立大学教官等の待遇改善に関する要望及び厚生補導施設の整備充実に関する要望が各々了承され、下記要望書が文部大臣等関係方面に提出された。

平成6年7月8日

国立大学協会会長

吉 川 弘 之

国立大学教官等の待遇改善に関する要望書

国立大学教官等の給与等の待遇改善については、人事院をはじめ関係機関の特段の配慮を得て改善がなされてきたところであり、そのことについては、関係各位のご努力に対して深く感謝する次第であります。

いうまでもなく、近年、教育改革の問題が焦眉の国家的課題とされ、大学についても、教育・研究の充実整備が課題となっていることは周知の事実であります。この課題に応えるうえで、まず何よりも大学自身がその教育・研究体制の改革に取り組むことが必要であり、現在、多くの国立大学が自己点検・自己評価を実施し、それを自らの大学の改革と活性化の契機とすべく努力しているところであります。

それとともに、大学の質的向上を図るには、その担い手である大学教官等に有為な人材を確保することが基本的前提条件であり、それを充たすためには大学教官等の待遇改善を図ることが一つの必須要件であります。

しかしながら、それはいまだ十分であるとは言えない状況にありますので、さらに以下の諸点につき特段の措置を講ぜられますよう、ここに重ねて強く要望する次第であります。

記

1. 教育職(一)の俸給水準の引上げを行う等を含め俸給体系を是正すること。

大学は高等教育および學術研究を推進・発展させる中心の存在として社会の付託に応えて、その任務を果たしている。科学技術の著しい進展と国際化の時代にあつて、その責務は益々増大しているところである。そのときにあつて、大学の教学の中心の担い手は大学教官であり、教育・研究について絶えざる情熱と高い能力を有する優れた人材を擁することは大学の根本であることに鑑み、その俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう特段の配慮を強く要望する。特に近年、国立大学の教官の給与水準が民間企業研究所や私立大学のそれを大幅に下回っている実態が人材確保の障害の要因ともなっていることに配慮しその急なる改善が待たれる。

また、助手について高校教諭の給与を下回る実態や教務職員の給与の頭打ち等の問題があり、これら職員の格差是正を図る。

なお、以上の俸給水準の引上げと同時に特に中堅教官の給与配分について改善するとともに、現行の昇給延伸制度についても、教官の職の高学歴による高年齢就職等による特殊性に着目してその年齢の引上げを図る。

2. 部局長(学生部長、事務局長等を含む。以下「部局長等」という。)について指定職の完全適用を図ること。

部局長等及び教育、研究の功績顕著な教授に対する指定職の適用拡大については改善が図られつつあるが、しかしながら、まだ十分な状況とはいえない。

指定職制度は、特定の職務就任を条件に適用するので本来の趣旨であることを踏まえ、部局長等については、その在任期間中はすべて指定職俸給表が適用できるよう措置する。

また、特に教育、研究の功績顕著な教授に対して指定職俸給表の適用をさらに拡大する。

3. 管理職手当の適用対象の拡大と増額を図ること。

近年、大学における管理運営の職責が益々重くなりつつある実情に鑑み、学科長、全学段階の委員等の学内教育行政の要職にある者について、管理職手当支給の途を開くよう配慮する。

特に、学科長については、法令上の職として位置付けられていることを踏まえ、早期に措置する。

なお、部局長等について指定職の完全適用を前項で要望しているところであるが、指定職が適用されるまでの間、引き続きその増額を図る。

4. 大学教官特有な職務に見合う手当として「大学研究調整額」(仮称)を新設すること。

大学教官は、高度の専門教育を行うばかりでなく、進展極まりない学術の研究について一定の業績を常に要請される。そのため、各種学会活動や独自の情報の収集等多様な教育・研究活動を遂行することが必須となっている。

しかしながら、このような多様な教育・研究活動に際して、自費から支出する研究費が少なくないことが、当協会財政基盤調査研究委員会が行った全国調査結果により明らかになっている。

この特別な経費負担に対する措置として「大学研究調整額」(仮称)の新設を図る。

なお、職務の特殊性に基づきすでに支給されているものとしては、義務教育教員には「教職調整額」、医師等には「初任給調整手当」等がある。

5. 教育・研究支援職員等の待遇の抜本的改善を図ること。

当協会は、かねてから大学特有の専門職である技術職員等の教育・研究支援職員の抜本的な待遇改善を要望し、「専門行政職俸給表」の適用を切望してきたが、これら職員の現状が同俸給表を適用できる状況に置かれていないとされ、その適用が見送られてきたところである。

しかしながら当協会としても、教育・研究支援職員の在り方について、先に、各国立大学に対し、教室系技術職員の組織化および研修等についてその実現方を要請し、現在までに職員規模で相当数が組織化され、また、多くの大学において多様な研修が行われている。

「専門行政職俸給表」への移行のための条件が成熟

された状況を踏まえて、早期かつ円滑に実現されるように努力されたい。

また、大学における教育・研究支援職員の教育・研究に果たす役割は大きく、かつ不可欠なものであり、俸給表の種類にかかわらず、これら職員の俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう措置する。

6. 大学の中堅職員（事務系）の待遇改善を図ること。

大学においては、事務長、補佐、係長等の定数が固定化されており、豊富な職務経験、職務遂行能力を持つ適任者でありながら、昇任・昇格が限定されるために俸給の上で格差を生じている。このことは、大学の中堅職員等に職務遂行意欲を欠くこととなり、ひいては大学運営の業務に重大な影響を及ぼす結果となりかねない。

また、特に近年教育研究の国際化に伴う国際学術交流や留学生受入れ、大学院の整備充実、教育研究システムの多様化、複雑化への対応等高度の専門性を要する新たな業務が激増している。

よって、引き続き専門職員制度を一層拡大するとともに上位の級別定数について特段の措置を図る。

7. 看護職員の待遇改善を図ること。

医学・医療の進展に寄与する診療、教育、研究の場であることを使命とする大学病院において看護職員に課せられた任務は極めて高度化、専門化しており、その役割は重要なものとなっている。

しかしながら、近年、特に看護職員に優れた人材を確保することが困難な状況となっている。この状況は大学病院に限った問題ではなく、このため看護婦等の待遇改善等を目的として看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定されているところである。

看護力の強化は、大学病院の運営にとって不可欠の課題であり、初任給を含む給与水準の引き上げを引き続き図るほか、夜間看護手当の増額を図る。

また、看護職員の勤務形態の特殊性等に配慮し、勤務環境の改善を図る。

学生の厚生補導施設のうち課外活動施設については昭和56年、昭和61年にその整備拡充を要望申し上げましたところ、逐次その整備が図られ感謝しているところであります。

しかし、学生の厚生補導施設に関して学生生活全般を考えていくとき、整備拡充はひとり課外活動施設にとどまることなく、食堂、学生ホール、宿舍更には大学会館を含む厚生補導施設全体に目が向けられなければなりません。さいわい、近時教育研究の環境は急速な改善がなされるようになりましたが同時に厚生補導施設もこれに劣らぬ充実が図られるべき時期にきています。

この点に鑑み、国立大学の厚生補導施設の現状を調査し、それに基づき施設の整備充実についての提案を行いますので、実現方につき特段のご配慮を賜うよう強く要望いたします。

調査結果によれば、大学の規模・歴史等により厚生補導施設の実態はさまざまであり、例えば既設の大学のある部分に著しい老朽化がみられ早急の対応を必要とするもの、或は新設・移転を行った大学においてはそれらが不足ないし狭隘の状況にあるなど、いずれも深刻な問題を抱えていることがわかりました。そして共通していえることは、昭和35年に定められた基準面積はその後多少の手直しがされてきたとは申せ、そのみでは学生生活環境の快適化に到底応えられるものとはいえず、早急に総合的な検討が急がれるという点であります。

近時補正予算等により、かなりの配慮が厚生補導施設の充実には払われるようになったことは感謝に堪えませんが、継続して一層の予算措置のなされることを切望します。

以下、厚生補導施設を福利施設、課外活動施設、学生宿舍、駐車場の各項目に分け、問題点と整備拡充に関する要望を記します。

1. 福利施設

① 学生食堂

食事は学生生活上きわめて重要なことであるのに、学生食堂に対して十分な配慮がなされてきたとは思えない。学生食堂は各大学でさまざまな問題を抱えている。新設・移転の大学は概して付近に民間食堂等のないところが多く、学生食堂に依存せざるを得ないにも拘らず、施設・設備の内容・規模ともに不十分である。また市街地にある既設の大学の食堂には老朽化が目立つ。大学によっては保健所の指

平成 6 年 7 月 13 日

国立大学協会会長

吉 川 弘 之

厚生補導施設の整備充実に関する要望書

摘を毎年受けるなど悲鳴に近い改善要求の声がきこえてくる。食堂の貧寒さはいきおい学外のものを利用することにつながり、利用者減は大学食堂の経営困難となって現れる。

食堂は単に空腹を充たすためだけの場ではなく、そこへ喜んで食事に赴けるような快適な場所として整備される必要がある。

② 学生ホール等

学生が相集まって歓談できる場としてのホールや広場の確保は学生生活にとって不可欠である。かかる空間はこれまでややもすれば軽視されてきたところであるが、大学は勉強さえていればそれでいいのだという考えはもはや通用しない。理系の学生は研究室配属などで高学年ともなればそれらしき所を得るのであるが、文系の学生は集まって顔を合わせるの教室以外にはない。米国でスチューデントユニオンといえば結構なロビーなどがあり、そこで種々の交友が行われるのであるが、日本の大学にはそれが非常に少ない。休講時或は休憩時そのような場所がないこともあって、学外に去ってしまう学生も少なくない。教育上考えねばならぬことである。

最近の大学会館はこの点に配慮したものが現れはじめたとはいえ、既設の大学会館等の多くは食堂・売店等にスペースをとられ、このために利用する場所がきわめてせまめられているのが現状である。

2. 課外活動施設

課外活動は大学教育の一環として重要な位置づけを占める。入学時のガイダンスでも勉学だけでなく、体育・文化・社会の各方面に活発な課外活動を行い、以て全人的発達を遂げよと学生に告げる大学も多いはずである。ただその根拠地となる諸施設は概して不足・狭隘・老朽・不潔（これは学生の責任でもあるが）な状況にある。課外活動の活性化を目指す以上、そのための施設（体育館をはじめとする体育諸施設、文化活動施設、サークル室、部室など）の充実はきわめて緊急事である。

3. 学生宿舎

学生宿舎の一部は消防署より防火上の危険を指摘されるところすらあるなど老朽化が進み、早急の対応を要する。そうしたなかで、相部屋の旧寮はいわゆる新

規格寮に建て替えられつつある。ただ新規格寮には食堂を設けないこととなっているので、宿舎の設置場所いかんによっては学生に不便を強いることにもなりかねず、この点に問題が残る。これからの学生宿舎は学生のための厚生施設として居住空間の整備が重視されるべきで、居室は個室とし、キチネット・バス・トイレの設備も含まれることが必要となろう。

また、大学院学生に対しては学部学生に対するのとは異なる専用宿舎が用意されるべきである。その設置が現状では困難であるならば、個室面積を留学生と日本人学生と共用の混住寮と同様の13㎡にすること等も含めて、とりあえずは大学院・学部混住とするほかはなかろう。ただし、これはあくまで一時的なものであり、大学院拡充という方針からすれば、家族宿舎を含む大学院生専用（書物等の収納のスペースをもつ）の宿舎が速やかに設置されなくてはならない。

4. 駐車場

自動車社会ともいえる今日、自動車利用とそれに伴う駐車場設置は不可避なことである。特に市街地を遠く離れ公共輸送に恵まれぬ地にあつては、自動車利用は教職員のみならず学生にとっても必須となっている。

駐車場を欠くままに行われるルール無視の不法駐車は、学内のモラルの頹廃につながる。規制を酷しくしたために起こる学外駐車は、住民の大学への反感を募らすばかりである。

駐車場建設・維持の費用は最近徐々に認められるようになったが、今後これの拡大が望まれる。

ただし、自動車の使用は各大学とも節度ある抑制を心がけねばならぬことは当然である。

学生に快適な学園生活を提供することは、元来もっと早くから考えられねばならなかった課題であります。大学入学志願者は、その大学における教育研究の内容や質の高さを理解しようとすると同時に、同じ程度の関心をもって学生生活関連の施設にも目を向けるにちがひありません。私立大学との比較などという次元の問題ではなく、入りたい大学、入ってよかったと思わせる大学たらしめるためにも、厚生補導施設のより一層の整備拡充が求められるゆえんであります。

—京都大学の百年（第1回）—

学内における記念植樹について

大学の構内を注意して歩いていると、様々な種類の碑が建てられていることが分かる。百年史編集史料室では、本部・西部・北部・総合人間学部・医学部・病院・薬学部の各構内を歩き、どこにどのような碑があるか調査を行ってみた。

まず、総数及び内訳は表1のとおりとなっている。「その他」にはいろいろな碑があって、有名な徳富洪水寄贈の木について記した碑（本部）や福井謙一名誉教授のノーベル賞受賞記念の碑（同）があるかと思えば、皇紀二千六百年祝賀記念植樹（同）、実験動物供養之碑（医学部）のようなものもある。しかし、群を抜いて数が多いのは、卒業や退官記念の植樹について記した碑である。これらについて若干の整理を試みたのが表2～5である。古くて文字が薄れかけているものや、植樹を行った主体・年代などを明記していない碑もかなりあったが、学部や教室の事務室に問い合わせたところ、植樹に関する資料はないとのことだったので碑に記されている内容から判断するしかなかった。今回の調査から、とりあえず次の二点を述べることは可能であろう。

①卒業記念、退官記念ともに部局に非常な偏りがあること。調査した範囲では文科系の部局においては植樹は皆無であった。工学部においても、植樹されている位置が電気工学・土木工学・建築学の三教室の周囲に集中しており、これらの卒業生によるものである可能性が高いが、碑には明記されていないものが多く、断定はできない。

②植樹された年代も集中していること。卒業記念についていえば1950年代・60年代にピークがあるが、その後は減少している。特に卒業した年に植樹を行うということは最近ではほとんどなくなっている。逆に退官記念の方は1980年代・90年代になって急増していることが分かる。

そもそも、記念植樹という習慣がどれくらいの歴史をもつものなのか不勉強のためよく知らないのだが、成長していく樹木を見ることによって植樹以来の年月を実感できるところが単なる記念碑とは異なる点であろう。また、この習慣が近代の学校現場に入ってくるという事情は、教育史の対象として考えてみる価値があるように思われるがどうだろうか。

最後に調査中気づいたことを一つ。医学部の構内で、掘り出されて放置状態にされている碑が二基見つかった。このようになってしまうと、もとあった場所がどこであったか確定するのは困難になってしまう。周知のように現在学内では盛んに工事が行われているが、植樹された樹木や石碑も立派な歴史的遺物であり、その取扱いには慎重な配慮が必要ではなかろうか。

表1 記念碑の内訳

卒業記念植樹	50
退官記念植樹	20
教室創設記念植樹	5
その他	26
計	101

表2 卒業記念植樹部局別内訳

	A	B	C	計
工	9	12	11	32
農	1	1	2	4
医	13	0	1	14
計	23	13	14	50

A：卒業した年に植樹
B：卒業後一定年数を経て植樹
C：年代不明

表3 卒業記念植樹の年代

	工	農	医	計
1910年代	0(0)	0(0)	1(0)	1
20年代	3(1)	1(0)	0(0)	4
30年代	1(0)	0(0)	0(0)	1
40年代	3(1)	0(0)	0(0)	3
50年代	0(0)	0(0)	8(0)	8
60年代	9(5)	0(0)	3(0)	12
70年代	2(2)	0(0)	0(0)	2
80年代	3(3)	1(1)	1(0)	5
90年代	0(0)	0(0)	0(0)	0

() 内は卒業後一定年数を経て植樹

表4 退官記念植樹部局別内訳

医学部	9
薬学部	2
胸部疾患研究所	5
医療技術短期大学部	3
不 明	1
計	20

表5 退官記念植樹の年代

	医	薬	胸	短	計
1960年代	1	0	0	0	1
70年代	1	0	0	0	1
80年代	4	0	4	3	11
90年代	3	2	1	0	6

(百年史編集委員会 西山 伸)

「百年史編集委員会からのお願い」

『京都大学百年史』は、部局史編の原稿の締切りが今年の9月末となっております。

本学の歴史を編纂するには、膨大な資料が不可欠です。つきましては、本学の歴史に関する資料（書類・書簡などの文献資料、写真・絵図・遺品などの文献以外の資料など種類は問いません）を所有されているか、またはその所在をご存じの場合は、その資料の貸与、情報提供等についてご協力下さいますようお願いいたします。

なお、ご協力いただく際は、百年史編集史料室（附属図書館4階、内線2651）までご連絡くださいますようお願いいたします。

平成6年度文学部博物館秋季企画展の開催

本学文学部博物館では、下記のとおり秋季企画展「尊攘派の群像」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（職員証又は学生証を呈示のこと）。

記

期 間 9月27日（火）～11月5日（土）

開館時間 火曜日～土曜日 9：30～16：30

（入館は閉館30分前まで、日・月・祝日は休館）

場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

展示内容

企画展「尊攘派の群像」

明治維新や幕末の志士に関心のある人なら、吉田松陰の画像や長州藩の奇兵隊日記、あるいは「尊攘」と大書した大原重徳の遺墨などを、一度は見たという経験があるのではないだろうか。

これらは京都大学附属図書館の「尊攘堂」史料として、保管し閲覧に供されているものである。尊攘堂とは、明治20年（1887）に、宮中顧問官、のち内務大臣となった品川弥二郎が、京都の別荘に設立したものである。ここには長州藩を中心とした維新の志士たちの遺墨が収められ、毎年祭典が行われた。

尊攘堂史料は、品川が生前精力的に史料の蒐集につとめたものであり、品川が亡くなった翌年の明治34年（1901）に京都大学に移管されることになった。また、その後諸方に住む志士の遺族からも、尊攘堂に収め祭られることを希って、遺墨等がよせられた。

こうして形成された尊攘堂史料には吉田松陰・桂小五郎、久坂玄瑞・高杉晋作ら長州藩のリーダーをはじめ、真木和泉・平野国臣ら尊攘激派の巨頭から、中央政局では無名に近い尊攘派の志士にいたるまで、実に多彩な群像の遺墨が見られる。

今回の展示には、この「尊攘堂」史料の主要なものが出品される。これまでほとんど外部に出されなかった短冊や手紙を貼った屏風も展示されるので、おもわぬ発見も期待されるであろう。

なお、1階総合展示室では考古常設展示「日本古代文化の展開と東アジア」を行っています。

（文学部）

計報

増山^{さよる}學 名誉教授

本学名誉教授 増山 學 先生は、8月2日逝去された。享年72。

先生は、昭和24年京都大学文学部文学科（英語学・英文学専攻）を卒業、京都女子大学講師、助教授を経て、同34年京都大学助教授（吉田分校）に就任、英語の講義を担当された。同38年教養部に配置換え、同46年教授に昇任、同61年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門は英文学で、主に、トマス・ハーディとヴァージニア・ウルフの作品の実証的研究において優れた成果を挙げられた。ハーディの小説『窮余の策』の翻訳は本邦初訳の業績である。

先生は教養部の創設期にあたり、英語教育のみならず語学教育全般の企画・刷新に尽力された。つとに、オーラル・コミュニケーションの重要性を洞察され、教養部語学実習室の創設に際して、終始、積極的に参画され、その後も運営委員長として、設備改善・授業方法の向上に努められ、今日の語学実習室の基礎を築き、本学の語学教育の発展・充実に貢献された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

加藤弘之 農学部助手

農学部助手 加藤弘之 先生は、8月7日逝去された。享年60。

先生は、昭和38年本学農学部を卒業、同40年同大学院農学研究科修士課程（林学専攻）を修了、同41年5月本学農学部林産工学科助手に就任された。

先生の専門は木材工学で、特に木材の膨潤・収縮の異方性と、それに伴う乾燥割れのメカニズムの解明、並びに木材の光沢発現機構についての研究を重ねられる一方、学部・大学院学生の実験、研究の指導に当たられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（農学部）

島本暉朗 名誉教授

本学名誉教授 島本暉朗 先生は、8月19日逝去された。享年78。

先生は、昭和14年京都帝国大学医学部を卒業後、本学化学研究所助手、医学部薬理学教室副手、助手、講師、附属医学専門部教授、医学部助教授を経て同33年教授に就任、薬理学第一講座を担当された。昭和43年退官され、同49年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和59年まで武田薬品工業株式会社生物研究所長、中央研究所副所長等を歴任された。

先生の研究のうち、特に生体アミンの研究は、我が国の薬理学の発展に重要な貢献をした。さらに胎児毒性の問題などにも取り組まれ、多くの優れた業績を残された。

また、日本薬理学会において評議員、理事、近畿部会長を務められ、昭和59年には同学会名誉会員に推されている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（医学部）

野村忠雄 法学部会計掛長

法学部会計掛長 野村忠雄氏は、8月24日逝去された。享年57。

同氏は昭和31年本学医学部附属病院に就職され、以後、経理部を経て、原子炉事験所経理課経理掛長、農学部附属演習林会計掛長、胸部疾患研究所管理課経理掛長、薬学部会計掛長、医療技術短期大学部会計掛長、法学部会計掛長を歴任、この間38年余りの永きにわたり大学行政、なかでも会計事務に貢献された。昭和61年には京都大学永年勤続者表彰（30年勤続）を受けられた。

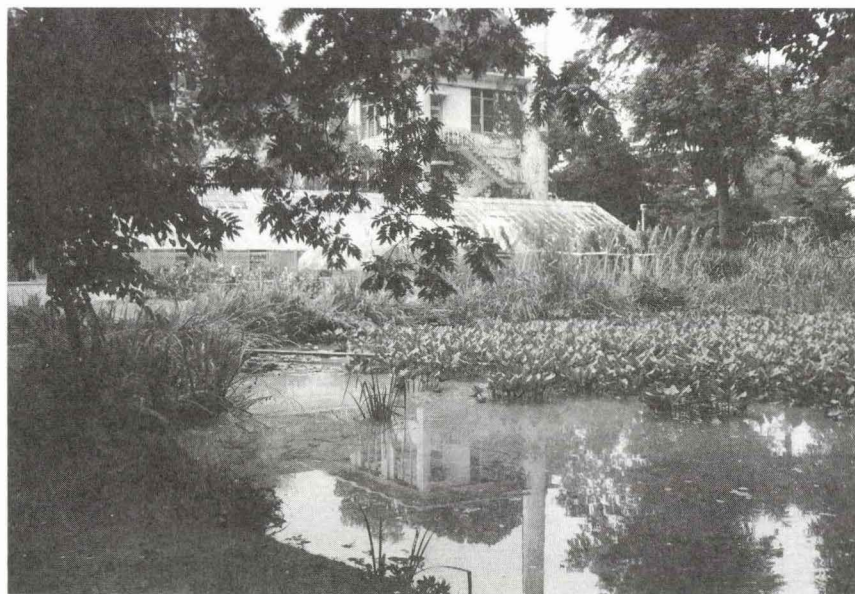
ここに謹んで哀悼の意を表します。

（法学部）

日 誌

(1994年6月1日～8月31日)

- | | |
|--|--|
| 6月7日 評議会 | 8日 人文科学研究所夏期公開講座「コミュニケーションにドラマをみる」(9日まで) |
| 〳 大学院審議会 | 12日 臨時評議会 |
| 8日 新入留学生歓迎パーティー | 〳 平成6年度京都大学技術職員研修(第12回) |
| 9日 総長、職員組合との交渉に出席 | (14日まで) |
| 15日 国際交流委員会 | 13日 国際交流会館委員会 |
| 〳 国際交流会館委員会 | 15日 環境保全委員会 |
| 〳 同和問題委員会 | 18日 工学部公開講座「人類の持続的発展と工学」 |
| 16日 創立記念行事(音楽会) | (以後、20日、22日、25日、27日、29日) |
| 17日 創立97周年記念式典 | 〳 農学部公開講座「農業簿記・農業経営講習会」(23日まで) |
| 〳 名誉教授懇談会 | 25日 理学部公開講座「現代数学展望」(29日まで) |
| 21日 評議会 | 27日 附属図書館商議会 |
| 22日 安全委員会 | 8月8日 数理解析研究所公開講座「数学入門」 |
| 25日 医療技術短期大学部健康科学公開講座「ストレスをめぐって」(以後、7月2日、9日、16日) | (12日まで) |
| 27日 防火委員会 | 23日 防災研究所公開講座「防災科学の最先端」 |
| 7月1日～11日 | (24日まで) |
| 総長、高等教育及び学術交流に関する調査等のためギリシャ共和国、ハンガリー共和国、連合王国を訪問 | 25日 農学部附属演習林公開講座「森のしくみと働き―芦生演習林への招待―」(27日まで) |
| | 〳 霊長類研究所公開講座「霊長類の進化」(26日まで) |



理学部・植物園

